

# ”砂防”の 発展に邁進

赤木正雄は、砂防技術や砂防事業の発展に全力を傾注し、多くの成果・業績を私達に遺した。今日の“砂防”は赤木によって創られた。

## 砂防一路シリーズ 第12回

# 私たちに遺した多くのこと

### 活動の基盤“砂防協会”を創る

赤木は災害を無くして欲しいという市町村長たちの願いに応えるため、昭和10年(1935)任意団体の全国治水砂防協会を設立し、5年後の昭和15年(1940)4月には、内務省認可の社団法人として生まれ変わった。

会員は、住民の“民意”を実現するため、その代表である市町村とした。

砂防事業を必要とする約80%強の市町村で構成された砂防協会は会員の力を結集し、目的を達成するため一致団結して行動することで、砂防によって地域を安全にしたい人や砂防を行う人の活動の基盤となっていく。

### 活動の拠点“砂防会館”を造る

「自前で集会ができること、自前の財源を持つことにより独立自存の策を立て、持続発展させること、会員の会費負担を軽減すること」

を理念とした砂防会館は、昭和31年(1956)に完成し、砂防協会の活動を広範・自在に行える屋台骨となり、この理念は見事に成就していく。

そして、会員や砂防事業を推進しようという人たちの活動の拠点となり、その力を導き出す「財源と空間と場所」を提供する存在となっていった。以来、60年を経過し老朽化が進んだ本館は建て替えられ、平成30年(2018)4月に「新本館」が完成し、砂防会館の歴史に新しいページが開かれた。



旧砂防会館本館と別館



砂防会館新本館

### 2つの赤木正雄銅像



豊岡市円山川畔の「答先師」の像  
(昭和40(1965)年建立当時)



砂防会館本館前の寿像  
(昭和46(1971)年 除幕式当時)

昭和40(1965)年4月、故郷・豊岡市の円山川畔に赤木正雄の銅像が建立された。赤木は地元市長らの銅像建立の話を通り続けたが、地元の要請は強く、それなら「銅像の側に1本の棒杭で結構でありますから『答先師』と書かせて下さい」と言って、実現した<sup>1)</sup>。「答先師」とは、師の教えに答えるという意味で、赤木が入学した第一高等学校の校長新渡戸稲造が「誰か治水に一生をささげるものはいないか」と問いかけた訓示に感銘し、自分の進むべき道を治水、中でも川の源から治める砂防に決めたという。その想いを残したいという願いからであった。

もう一つの銅像は、砂防会館本館前に立つ。赤木は豊岡の銅像と同様、建立の要請を拒み続ける中、病に倒れる。砂防協会は、赤木の功績を称えるための寿像建立を理事会で決議し、昭和46(1971)年11月除幕式を行うが、赤木は完成した寿像の姿を見ることはなかった。

### 内村鑑三の教えと敬愛する兄、一雄

豊岡の銅像の完成式には赤木自身が出席し、謝辞を述べている<sup>1)</sup>。

「吾々は如何なる職業に従事していても、自分が産まれて来た時よりは多少でも幸せな母国にして、これを子孫に引継ぐ責任があります」

という内村鑑三の「後世への最大遺物」の一節を紹介している。赤木正雄の兄、赤木一雄は早稲田大学の学生の時、内村鑑三に師事した。正雄は敬愛する兄、一雄を通して内村鑑三を尊敬し影響を受けた。

内村鑑三は、

「人間が後世に遺すことのできる、そうしてこれは誰にも遺すことのできる場所の遺物で、利益ばかりあって害のない遺物がある。それは何であるならば『**勇ましい高尚なる生涯**』であると思います」

と、書いている<sup>2)</sup>。



左より 兄嫁 うた、赤木正雄、兄 赤木一雄、兄二男 赤木蘇夫<sup>3)</sup>

### 赤木正雄の遺した多くのこと

赤木は、砂防事業や技術を進展させ、砂防協会や砂防会館をつくり、偉大な遺産を私達に残してくれた。内村鑑三が言う「**勇ましい高尚なる生涯**」という「砂防一路」に邁進した赤木の精神こそ、私達に残してくれた「最大遺物」の一つであったのであろう。

### 砂防一路の締めくくり

「砂防一路」<sup>4)</sup>の最後に、赤木は、

「**万嶽重疊の難路を切り開くべきものと覚悟のことと承知するが、この上とも固き一団となってわが国治水の発展にあたらんことを強く要望するとともに、一方国民大衆もかかる治水悲願の土を迎うるに常に公正と激励の思いを以てせられんことを**」

と後世の人たちへの激励を込めて「赤木正雄の砂防一路」を締めくくっている。



著書「砂防一路」<sup>4)</sup>背表紙

### — 結び —

昭和46年(1971)の文化の日に、赤木正雄は文化勲章を受賞し、それから50年経った2年前(令和3年)の11月にこのシリーズを始めました。第1回は「赤木正雄 文化勲章受賞から五十年」と題し、2回目からは赤木正雄の「砂防一路」を辿って、その歩みを紹介してきました。

最終回は、赤木正雄が私たちに遺した多くのことを記して締めくくりとしました。改めて12回のシリーズを振り返っていただければ幸いです。

長い間お付き合いいただきありがとうございました。

令和5年(2023)10月

### 参考文献

1) 但馬赤木会：赤木正雄博士とご令兄、1988.10

2) 内村鑑三：後世への最大遺物 デンマーク国の話、岩波書店、2005.5

3) 全国治水砂防協会：赤木正雄先生追想録、1973.9

4) 赤木正雄：砂防一路、(社)全国治水砂防協会、1963.7